

(金のエンジェル賞 小学生中高学年の部)

最後の夜

小六・米島 夏綾

「こっちは片付いたよ。そっちはどう。」

段ボールが積み上げられた部屋から男の人が顔を出し、台所にいる女の人に声をかける。

「これで終わるわ。」

食器を段ボールにていねいに並べながら女の人は答える。満月がきれいに光る夜、とあるアパートの一室で引越しの準備をする一組の家族。明日になれば新しい家での生活が始まるのだ。段ボールを触りながら

「この家には長い間お世話になったわね。あら、あの子はもう寝たのかしら。」

女の人がすっかり静かになった部屋に向かって言う。二人がドアを開けると、一人の子どもがすやすやと寝息を立てている。

「引越しを楽しみにしていたからね。それにもうこんな時間だよ。」

男の人が時計を見ながら優しく笑う。時計の針は間もなく日付けが変わることを教えてくれていた。二人は荷物の整理を終え、明日に備え寝室へと向かう。口にすることはなかったが、二人ともどこかさみしい気持ちだった。

「それじゃあ、おやすみなさい。」

こうして町の明かりがまた一つ消えていくのだった。

一匹のねこが夜道を歩いている。その顔や体には大小様々な傷跡が痛々しく残っている。ある時はエサのため、ある時は自分の縄張

りを守るために彼は他のねこ達と戦い続けた。いつの間にか、彼はこの町で一番強いねこになっていた。何も心配する必要がなくなつたと彼は知っていた。それでも。

「本当に行くのか。」

彼の後ろから体格のいいねこが問いかける。その問いに足を止める。厚い雲におおわれた空を少しの間見上げて彼は答える。

「決めたのさ。それに、もう疲れたんだ。」

一度も後ろを振り返ることもせず、彼は本心を打ち明ける。確かに今この町で一番強いのは俺だろう。しかし、いつまでそれが続かなか分らない。だから決めたのだ。

「人間なんて何をするか分からないのに。」

体格のいいねこは深く息を吐きながら言う。彼は軽くしつぽを振り、再び歩き始める。

「明日からはお前がこの町のボスだな。」

そうつぶやいた彼の顔に、雲の切れ目から月明かりが光り輝く。やがて目的の家にとどり着いた彼は大きな声で鳴く。すぐに玄関のドアが開く。温かい光とともに。

少年は今夜も望遠鏡をのぞきこむ。きれいに輝く星の姿が目映る。少年の足元ではコオロギがもうすぐ夏が終わるとさわがしく鳴いている。現実に戻された気がして思わずため息が出る。少年は夏休みの間、祖母の家に来ていた。自然が豊かで、人も車もあわただしくない祖母の住む町が少年は好きだった。明日にはまたあのコンクリートジャングルに帰らなければいけない。今夜も晴れてくれて良かった、心の中でぽつりと云った少年は再び望遠鏡をのぞきこむ。そこには、まばゆい光を身に包み込んだ月の姿があった。

地球から遠く離れた場所で月は全ての夜を見ていた。数え切れな

い夜を、数え切れない物語を。目を閉じ月は深く息を吐く。月が先程まで見ていた少年のように。

「一体どうしたのだい。」

今日も見ることから暑そうに燃えている太陽が心配そうに声をかけてくる。

「あら、見ていたのね。」

月は恥ずかしいところを見られた、と少し照れくさく思いながらも考えた。本当のことを話したらもっと恥ずかしいかしら、と。

「最近はずっと浮かない顔ばかりで、何だか元気が無いみたいだから気になって。」

太陽の一言で月は全て話そうと決心した。

「私が地球を見ているのは知っているわね。」

月は話し始めた。太陽は静かに聞いていた。

始まりはいつだったのか覚えていない。月は地球をずっとながめていた。地球には月には無い色があった。海は青く、雲は白い。月はそんなきれいな地球が好きだった。やがて地球に生命が誕生した。そこにはたくさんさんの希望や不安などの感情が存在した。月はますます地球を見るのが好きになった。しかし、月は気が付いてしまう。月が見られる地球は夜の間だけだった。あの引越しを楽しみにしていた家族はどうなったのだろう。あの人間と生きていくと決めたね。これはどうなったのだろう。どれだけ月が望んでも、彼らの夜以外の物語を見ることはできなかつたのだ。月はこれ以上地球を見続けるのを止めようと考えていた。いつの間にか楽しかったはずの時間が苦痛へと変わってしまったから。

話し終わると、それまで静かに聞いていた太陽が口から炎を吐き出す勢いで笑い始めた。月は、やはり話すのではなかったと後悔し

た。しかし、太陽は意外な言葉を発した。

「はっはっは。安心したよ。僕はてっきり月がもうすぐ消えてしま
うのかと心配していたからね。」

月は太陽が笑った意味を理解した。同時に月も安心する。太陽は
話し続ける。

「僕は朝でも昼でも夕方でも地球を見られるよ。月が気にしている
人間やねこの様子を、僕が見て明日から伝えようか。」

太陽からの思わぬ提案に月は心を躍らせた。月はついに知ること
ができるのだ。朝日に照らされた、地球で生きる彼らの希望に満ち
あふれる物語の続きを。もし、人間のように自分に手足があったら、
今ごろ飛び跳ねて全身で喜びを表現していただろう。月はまばゆい
光を身に包み込み、太陽に答える。

「何て素敵なの。もちろんお願いするわ。でも、知らなかったわ。
あなたって、こんなにも優しかったなんて。」

そう言うと、太陽はだまってしまった。気のせいか今までよりも
更に赤く燃えているように見える。月は静かにほほ笑む。こうして
月にとって大切な夜は終わりを告げたのだった。



最後の夜
米島夏綾

画：うつみのりこ
